

おわりに

一般社団法人 日本小児東洋医学会 代表理事 崎山武志

医学教育の中に、卒業までに習得する必要がある項目に、「和漢薬を概説できる」が入ってからすでに10年が経過しました。各大学での漢方の授業が、全国すべての医学部で行われるようになり、多くの医学部付属病院で、漢方外来も開設されて来ています。漢方あるいは東洋医学の授業の内容と漢方外来の規模には、大学間で大きな隔たりがあります。しかし漢方教育が導入される以前に卒業した医師に比べると、卒前教育の授業で、曲なりにも漢方や東洋医学の一端を垣間見ることが出来たかどうかは、卒後の医師としての幅に大きな違いがあると思います。小児科医で漢方薬を処方する医師が以前は少なく、大学で漢方薬を処方すると、周囲に奇異な目があったように思われます。しかし最近では、大学でも普通に漢方の話ができ、処方される先生方も増えています。大学の卒前・卒後教育で学んだ西洋医学の知識と治療は、一般の病院や開業の臨床現場で大いに役立ちますが、これのみでは何か物足らず、もう一味別の手だてがないのかな〜と、日常の診療で感じるが多々あるように思います。このような臨床の現場で、もっと患児のために役立つ治療はないかと想いを抱く人達が集まって結成されたのが旧日本小児東洋医学会です。本学会は西洋医学的な治療を中心としながら、卒業後に漢方を学んで、病児の治療に、さらに良い医療を実践するように努めています。また本学会には、基礎の薬学の先生方にも参加していただき、臨床的な効果を学術的にも裏付けるべく研究・研鑽を重ねて、学術団体としても発展しています。最近のこうした状況の変化があっても、小児科の卒後教育の中で、漢方を教えられる専門医は限られています。そこで、漢方の初心者からすでに漢方を処方されている先生方まで、小児科の日常診療のなかに漢方治療を取り入れて、子どもの病気の治療をより良くするために、学会とし、この「手引き」書を発刊しました。本書は旧本学会の理事・評議員が中心となって、各専門分野での漢方のエキスパートとして、各論を執筆しています。漢方は理論よりも実践の医療なので、まずは漢方薬を使ってみて、自分で手応えを感じ、さらに症例を重ね経験を積んで漢方治療を自分のものとする、の繰り返しです。ただし、漢方薬を処方するには、最初は何か手引きがあると取り掛かりやすいものです。是非、本書を日常の診療の中で、手元に置いて活用していただけると、編者として幸甚です。今回の第2版発行に当たって、一部修正を行い、処方索引を加えました。本「手引き」書はまだまだ不十分な点や、不備な点もあると思いますが、漢方医療を小児科の診療の中に取り入れていただく嚆矢となることを念じています。本書は医療用エキス製剤で可能な治療と処方に限定したので、漢方を専門に診療されている先生方、煎じ薬を主に扱っておられる医師や薬剤師の先生方、あるいは中医学で治療されている先生方には記載や処方にご不満があると思われそうですが、本書に対して忌憚のないご意見をいただければ、この「手引き」書を基に、今後さらに良い改訂版の発行に繋ぎたい所存です。